

近代語に探る<終止形準体法>の萌芽的要素

著者	島田 泰子
雑誌名	近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書
ページ	201-210
発行年	2012-10-31
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ; 12-03
URL	http://doi.org/10.15084/00002774

近代語に探る 終止形準体法 の萌芽的要素

島田 泰子 (二松学舎大学文学部)

1. はじめに

島田(印刷中)において私に「終止形準体法」と名付けた表現様式について、その新奇性を分析するとともに、歴史的な位置付けや表現成立の経緯・背景についても解明を試みようとするとき、関連する(問題となる)ものとして注目されるのが、以下の類型を備えた表現である。

- ・「活用語の終止形 または 連体形」 + 「格助詞 ガ または ヲ」
- ・「形容詞 口語終止形」 + 「係助詞 ハ または モ」

近代におけるこういった類型の実例を広く採集する作業は、形態素解析を経てタグ付けされたコーパスによって、飛躍的に効率化される。本稿では、コーパス利用ならではの用例収集とその応用研究の一例として、近代語における終止・連体形の準体法的な用法及びその類例を検討し、今日的な「終止形準体法」の歴史的背景を探りたい。

2. 終止形準体法 について

島田(印刷中)において「終止形準体法」と名付けたものは、次のような表現の下線部例¹である。文法的には、「活用語の終止形が、文中において体言に準ずる扱いを受け、格助詞ヲ・ガ・ニなどを伴って、述語に対する格成分として用いられたもの」と一旦記述できるものであるが、近年、特に広告表現を中心とした特殊な位相において目立つようになってきた。

- (1) 一番ははじめのうまいを引き出す (キリン一番搾り cf ナレーション、2008.6.4 録画)
- (2) かわいいが好き! (米子空港売店 どじょう掬いまんじゅうコピー、2009.11.1 撮影)
- (3) 薄いに、恋して。(携帯電話 薄型機種 pst.、2007.7.29 撮影)
- (4) 祝うを、素敵に。(紳士服の AOKI 夏の礼服 cf コピー&ナレーション、2012.6.20 録画)
- (5) 実感。剃るから、すべらせるへ。(Gillette 紳士用剃刀、cf コピー 2012.6.23capt.)

ヲやガなどの格助詞を伴うことから、これらの形容詞・動詞の終止形は、構文的には極めて名詞的な用いられ方をしているといえる。ただし、いわゆる居体言のように安定的に体言としての用法を定着させたものではなく、広告におけるキャッチコピー、書物・展示・番組名のタイトルなど、位相的にはやや偏りを伴って多用される現状が観察される。体言化にきわめて近いが、あくまでそれに準ずる準体的な用法とするのが妥当と見られる。

1 出典注記について。TVcf については録画日、新聞の記事・広告などは掲載日、車内広告・看板・ポスター(pst. と略記)等は撮影日、インターネット上の用例はキャプチャ(capt.と略記)した日付を示した。

早いものとしては1980年代に類似した用例が複数確認されるが、いわゆるゼロ年代以降に急増したらしく、多用される中で違和感も薄まり一般化しつつあるように見受けられる。

(6)~(8)のような感嘆符や読点、終助詞を伴うものや、(9)のように引用符が用いられたものを考えあわせるに、ある種の引用的な用法と見なすことができる。

(6) ウレシイ!をカタチに。(消費者金融・レイク pst.、2008.5.12 撮影)

(7) 家を買う、をギャンブルにしない。(住宅情報会社 地下鉄車内 pst.、2012.3.3 撮影)

(8) 列車を選ぶ人は、君のいいなを願う人です。(JR 東日本 pst.、2007.1.20 撮影)

(9) 看護師の“はたらく”を応援！(転職支援サービス会社 車内 pst.、2010.7.5 撮影)

引用された語句が文中における格成分としての自在さを持つことについては先学の指摘するとおりであるが²、稿者がこれらをあえて「終止形による準体法」とみなし 終止形準体法 と名付けたのは、以下の2つの理由による。

1つめは、(10)(12)のように、従来ならば居体言が用いられる位置に代替的に置かれる傾向があり(引用符なしでの使用も多い)、これらを(11)(13)のようなものと対比した際に認められるある種の新奇性や脱規範性に注目したこと。

(10) 天然水の力でうまいをつくる。(サントリー 缶ビールパッケージ、2006.5.26 撮影)

(11) 本物の「うまさ」を贈りたい。(アサヒ缶ビール広告 pst.、2007.11.20 撮影)

(12) おいしいを、日本の畑から。(東都生活協同組合 新聞折込チラシ 2008.4)

(13) おいしさを、笑顔に。(キリン cf、TV 画面より 2008.6.4 撮影)

2つめは、現代語における活用語の終止形が古代語の連体形に由来することから、問題の表現が「弱きヲ助け、強きヲくじく」「故きヲ温ねて新しきヲ知る」(以上、形容詞の場合)、「負けるガ勝ち」「稼ぐニ追いつく貧乏なし」(以上、動詞の場合)のような文語調に由来するもの(連体形準体法の名残り)と見ることもでき、両者の連続性を等閑視しえないこと。

以上2つの理由により、用言体言化の消長という観点から一貫して扱おうとする場合に、単なる引用に留まらない「(広義における)準体法」として認定することには、一定の意味があると考えられる。旧来の連体形準体法と今日的な 終止形準体法 をつなぐものとして、近代における終止・連体同一形の準体的な用法について観察する必要がある、ここに生じることになる。

なお、 終止形準体法 と関連する類似の表現として、格助詞(ガ・ヲなど)を伴うもの以外に、次のような八を伴うものにも目配りが必要である。

2 例えば、山田孝雄「引用の語句はその文中に於いては体言と同等のものとして取り扱はるゝものなるが、その取扱は大体準体句に準ぜられる。《中略》引用の語句も亦主格、賓格、補格として用ゐられ、又往々連体格としても用ゐらるゝことあり。」(『日本文法学概論』第五十六章 引用の語句)、藤田保幸「引用されたコトバとは、表現されるべき対象世界において所与のコトバが、実物表示されて、つまりは、類似的に模写・写像されて出てくるものであった。いわば、模写・写像されて再現された対象世界の一断片である。《中略》端的にいえば、文中にとり込まれ、一定の分布・一定の位置をとらされることで、相対的に品詞的役割を付与されるのだと見るのがよいだろう。」(藤田 2000 総論 p.58)など。

- (14) 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥 (ことわざ)
- (15) なんとか閉館 30 分前に着いたはいいが、身分証を忘れて入館できなかった。(作例)
- (16) カワイイはつくれる!! (エッセンシャル cf 字幕、2009.2.18 録画)
- (17) すっぱいは、ハッピーのもと。(カンロ 果汁グミ 車内 pst.、2009.7.2 撮影)
- (18) 懐かしいはうれしい (創業天和元年 カステラ元祖松翁軒 発行『よむカステラ』2008 年第 14 号)
- (19) 日本人は知っている。うまいは甘い。(キリン 新・生茶 pst.、2007.10.30 撮影)
- (20) 黒いは、うまい。うまいは、黒べえ。黒べえは、黒い。(黒べえ pst.、2008.6.3 撮影)

(16)などは「カワイイをつくる」のようなヲ格による表現が、(17)はガ格表現が、それぞれ前提として存在するものであり、終止形準体法 と無関係ではない。また、(14)(15)は、先に示した「負けるが勝ち」同様、特段の新奇性を持たないが、今日では同形となった終止形と連体形とのあいだに截然たる区別の意識は持たれにくく、形容詞における(16)(17)などの使用をどの程度意識の上で支えるものであるか、興味が持たれる。さらに言えば、(18)(19)のように述語部分にも形容詞が来るものは、(20)のような循環的な用例を含めて、歴史的にどこまで遡りうるかについて、慎重な検討が必要である³。

よって以下では、これらの類も、先に 終止形準体法 とした表現様式とともに取り扱うこととし、その実際的な用例を採集する。

3. コーパスを利用した用例採集

3.1 コーパス利用の利点・その1 (検索の便宜)

コーパスを利用して用例採集を行う利点の第一として、まずは検索の便宜における効率性が挙げられる。たとえば、本プロジェクトの研究のためにメンバーで利用している近代語のコーパス⁴ならびに検索ツール「大納言」(内部公開中)を用いる場合、

検索キーとして、「品詞」を「助詞-格助詞%」または「助詞-副助詞%」

その前文脈について、「活用形」を「連体形%」または「終止形%」

とそれぞれ指定すれば、この掛け合わせによる「連体形+格助詞」、「連体形+副助詞」、「終止形+格助詞」、「終止形+副助詞」の4パターンのもので、各コーパスから、現実的な用例として網羅的に収集できる。

単なる本文の電子化にとどまらず形態素解析を経て品詞や活用形などの情報がタグ付けされたコーパスは、特定の語(単語、熟語など)を調査対象とするだけでなく、こういった文法的な類型に着目した研究を行う場合にも、たいへん有効である。

想定範囲に限らない用例の博搜が可能となるのも、現実的な表現形の揺れを超えた「語彙素」へのヒットで遺漏の少ない収集が可能となるのも、形態素解析によりタグ付け済みであるコーパスならではの利点と言える。

3 シェイクスピア「マクベス」坪内逍遙 1935 年の訳に、「清美は醜穢、醜穢は清美」とある。

4 『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』などから成り、一部を青空文庫の本文から採用したもの。

るものを（「あるいは」に同じとみなして）一括して削除しつつ、「名詞+あるは、」とあるものをまとめて取り出す、など。（後者は、主格相当のものと同置換された八（先の(14)(15)の類）と見なして扱うこととなる。）

また、助詞ヲの前文脈でソートし、口語性の認められる（口語と同形の）終止形+ヲの用例を点検するなどの作業も、同じ文字列を持つレコードが一カ所にまとまった状態で行えば、きわめて効率的に進めることができる（下図）。

前文脈	半	後文脈	品詞	コーパス
6255	いでは無い、だから町の野暮測に馬鹿にされるのだから言ひかけておれぬ	私しさうな種色、何心なく美登利と見合す目つきの変容さ、坊前の祭の姿は	助詞-格助詞	近代語
6256	「痛くしては、軍衣は秋風山の頂上にて、自宗を人の丸帯少、此の秋の	結ばせて、原石に下駄踏すまで物ほけぬ。またかまぼかと潮の聲を七	助詞-格助詞	近代語
6257	いよいよ深き者は、いよいよ沈黙するが如し。而してその黙するや、これ	忘れたるに非ず。時あってしりとせば、その言も亦適切して、思	助詞-格助詞	近代語
6258	いなさい、いとも、足軽が平に上り、住士が大目上りに、直にその名	許さず、一櫛に目那様と呼て、その交際も旧く主権の備のごし。また上	助詞-格助詞	近代語
6259	いふは、軽重の別を知りて、此一言を聞かば印度人も又口を開	得ず、これを流行流達の雑書に比すれば、著作の心算は現出して、所	助詞-格助詞	近代語
6260	身女子の夜行に重大なる箱提灯を懐に持たざる者あり、州に出て	腹しむごとく、物を持つもまた不外聞と思ひ、刺衝道具の類は、些	助詞-格助詞	近代語
6261	身女子の夜行に重大なる箱提灯を懐に持たざる者あり、州に出て	腹しむごとく、物を持つもまた不外聞と思ひ、刺衝道具の類は、些	助詞-格助詞	近代語
6262	夫夫婦の間に重大なる箱提灯を懐に持たざる者あり、州に出て	腹しむごとく、物を持つもまた不外聞と思ひ、刺衝道具の類は、些	助詞-格助詞	近代語
6464	はえあふ心地す。いふはこれ「ロコセム」、『中ノリア』などいふ	待てるなるべし。』「か」語る處へ、胸につづけたる白前垂掛けたる下	助詞-格助詞	近代語
6465	つ、一ノ草に上りて、その微妙な露に露にまじりてあつた。此の	見、その外形を喜び愛惜を弄んたものはロマンチンな過去の詩人であ	助詞-格助詞	近代語
6466	他の歌の歌の歌、筆を握るまで来るを得ず、かくて、筆の筆の筆	見れば、たちまち飛びかいて、これを論ふ。隠れど、もし、語ら	助詞-格助詞	近代語
6467	別の歌の歌、筆を握るまで来るを得ず、かくて、筆の筆の筆	見を英雄の存在を思ふたれども、今の人物事の中にも見出す。こ	助詞-格助詞	近代語
6468	かたごころは暇ひながら、また地平上、思ふ脚よりも熱（一）度	見れば、ただ思ふ、ただ思ふ、ただ思ふ、ただ思ふ、ただ思ふ、	助詞-格助詞	近代語
6469	れるは、軽重の別を知りて、此一言を聞かば印度人も又口を開	得ざる可し。誠にその事柄も昔は昔を以て信するものに非ざるなり	助詞-格助詞	近代語
6470	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6471	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6472	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6473	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6474	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6475	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6476	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6477	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6478	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6479	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6480	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6481	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6482	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6483	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6484	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6485	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6486	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6487	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6488	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6489	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6490	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6491	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6492	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6493	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6494	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6495	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6496	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6497	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6498	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6499	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6500	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6501	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6502	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6503	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6504	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6505	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6506	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語
6507	しと進むや、我國の肩すかす前であらずと雖も、其勢力を他國に	得ること、我が國の其望多からざる同日の論にあらず、是れ	助詞-格助詞	近代語

4. 実例から（気付かれる点）

これらの作業を経て絞り込んだレコードを通じて、近代語における実例から気づかれることを、以下に記述する。先に2.において述べた 終止形準体法 との関連を探る意図から、格助詞は主格相当のガ、目的格のヲ、連体格のノについて特に注目し、係助詞は特にハ・モに絞って用例を検討した。その結果、形容詞と動詞の、今日的な終止形と同形のもの、文の（述語以外の）成分として準体的に用いられる場合には、いくつかの顕著な類型が存在することが指摘できる。

4.1 現代語形の終止形の例・形容詞の場合

4.1.1 ヲ格に立つもの（1）

まずは、形容詞について述べる。近代語資料にも、今日的な終止形と同様の語形において、以下のようなヲ格に立つ用法が見受けられる。

(21) 「すし」と書ける看板よりも「寿司」とヒネつたる漢字の看板多数を占めつゝあるは争ふことが出来ない、判りやすいを主とする花柳界でさへ「まちあい」と書かずし

て「待合」の漢字を喜ぶ位みである(太陽-192801-009_東京新旧看板考_)

(22)男が泣くてへのは可らしいでは無いが、だから横町の野蕃漢に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを恥かしさうな顔色、何心なく美登利と見合す目つきの可愛さ。
(AX_たけくらべ(樋口一葉))

(23)首筋が薄かつたと猶ぞいひける、單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの丸帶少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。(AX_たけくらべ(樋口一葉))

(21)は、「判りやすさを主とする」のようにサ語尾による体言化でヲ格に立ってもよさそうな点で、一見、先の(10)(12)との近さも窺わせる。その一方で、近代にこの表現が存在することは、先に示した文語調の連体形準体法「弱きヲ助け...」「故きヲ温ねて...」などとの連続性において理解される。(22)(23)も同様に、イ音便化を経た現代語の語形ではあるもののいずれも連体形由来のものともみなされ((22)は「我が」の連体修飾を受けての準体法、(23)は先行する名詞「丸帶」を含意し同格の用法に近い)、いずれも文語調との連続性が認められる。

4.1.2 ヲ格に立つもの(2)

こういった古語の連体形準体法に由来するものと異なり、終止形の用法に由来すると見なされ得る点で目を引くのは、次のようなものである。

(24)『どうだらうか』|小松は、|大隈と寺島の顔を見た。|『利子の高い安いを論じて居る場合にはありますまい、|一國の興亡にかゝる大問題、|構はない借りようではムらぬか』|(太陽-192505-031_明治初年外交物語(その八)五十万円対ゼロ_口語)

(25)風俗習慣の比較研究をする時には、|異地方住民相互の間に存する系圖的緣故の遠い近いを探り知る事が出来ませう。|言語の比較研究も亦諸種族の系圖調べの役に立ちます。(太陽-190102-044_諸種族相互の系圖的關係を考へ定める方法_口語)

(26)ときに、|念を入れて調べて置かなかつたのがいけないのだ。|それで一度、|どうしても白い黒いを分けてしまはうと云ふので、|裁判に持出しかけたんだよ。|(太陽-191701-039_戯曲 生きんとすれば 二幕 _口語)

対義関係にある二語の形容詞を対比的に並べまとめてヲ格に立てるこの構文は、終止形の一用法であった「善し悪しを定むる」(枕草子・能因本三—一段)などの流れを引くと見なされ、その点で、今日的な終止形準体法(多分に引用的なもの)にきわめて近い性質を持つ。

対義語を並べ(て対比させ)ることじたいが、「高いか低いかの問題」「遠いか近いかの関係性」などといった含意を生じさせて、つまり何らかの体言的なカテゴリを与えるという意味で、おのずと準体的であろうとするのであろう。また、それは「利子が高いか低いか、という問題」「系圖的緣故が遠いか近いか、という関係性」のような意味構造を担って提示される以上、おのずと引用的な性質を帯びるのであろう、と考察される。

4.1.3 助詞ハを伴うもの(1)、助詞モを伴うもの

形容詞の対義語ペアは、助詞ハ・モを伴う用法でも類型をなして目につく。

- (27) |此故に私は貝塚の廣い狭いは住民の多寡を示し、|厚い薄いは居住年月の長短を告げるで有らうと考へて居りますが、|(太陽-189509-042_石器時代遺跡の實踐は人類学上如何なる利益_口語)
- (28) 専門家のやうに美術の鑑定等が出来たわけではない。| 中には、|子には、|美術のいゝ悪いはわかつて居なかつた等と批難する人もある様であるが、|しかしそれはあまりに、|極端な批難であつて、(太陽-192513-028_浜尾子を追懐す_口語)
- (29) 先生、|小説などゝいふものは氣が乗らなければ書けないといふではありませんか。|氣が乗つたら、|苦いも辛いもございますまいに。|其所です、|其所です、|(太陽-189503-022_新聞小説(上)_口語)
- (30) 警部の古手ぐらゐが、|採用されてみたもので、|郡長の職は、|さうした事務の経験のふかい、|酸いも甘いも呑込んだものでないと満足につとまらぬものと考へられてみた。|(太陽-192502-053_官場の新人を評す_口語)
- (31) |國民として、|決して無責任をいふことを許さなくなつて來た。|いゝも、悪いも、|凡て國民の責任である。|(太陽-192511-026_日露国交と普選実施_口語)

ハを伴う(27)(28)が、ヲ格に立つもの同様、二語をひとまとめにして提示するのに対し、モの場合には(29)~(31)のように二語それぞれにモが伴われる点が異なる。前者(ハの例)にヲ格の例との類似性を認めるならば、(27)(28)を、終止形によって対比される二項を示す表現と見ることも出来るが、後者(モの例)に関しては、「老いも若きも」式の連体形準体法(動詞の居体言「老い」に相当する一般的な準体用法を持つものとして、形容詞では連体形が用いられる)に由来すると見ることも出来る。終止形と連体形が同一語形となった近現代語においては特に、(27)(28)の類における形容詞の用いられ方と(29)~(31)の類におけるそれとは不可分な連続性のもとで認識されるであろうから、これらは後の終止形準体法の一般化にとって無関係ではないと考えられる。

4.1.4 助詞ハを伴うもの(2)

形容詞の例では、助詞ハを伴う場合に、以下のような同語反復的な構文がまたひとつの類型として際立っている。

- (32) |お前様が風雅の道に、|お嗜みが無いのはなあ!|信孝 |何と云はうと、|無いは無いのぢや。|(太陽-190901-058_三七信孝_口語)
- (33) |大きいは大きいだけに影響も少ないけれど、|小さいは小さいだけに損徳の響きが甚しい、|まア比喻て見ると象と蚤の喧嘩だな、|(太陽-190902-022_銅山王_口語)
- (34) |積極とは初め何か儲け仕事でウンと儲け、|其れから政治を専門にすること、|チヨセフ・チエムパレンの如くするのであつて、|面白いは面白いが、|特殊の才がなくてはならぬ。|(太陽-190911-012_政治家と生活問題 大政治家と小政治家_口語)
- (35) 財政の関係等から、|遺憾乍ら中止しなければならぬこともあり、|或は又人口の関係若

は財政の関係は、苦しいは苦しいに相違ないけれども、其の政略関係或は對比隣列國の關係から、これ等の苦痛を忍んで擴張を斷行しなければ(太陽-191703-027_戦後の軍備問題_口語)

(36) |じつと此大佛殿を見てみると、|どうも均合が悪いやうに思へてならない。|大きいは大きいがどつしりとした大きさがなく、|宛然かも馬鹿に大きくて弱い力士を見るやうな感がする。|(太陽-191705-017_旧都の春を訪ねて_口語)

(37) |野田を總理大臣にしたいとは吉原盛隆でも思つて居まいね。|俊作でも、|したいはしたいだらうが到底駄目だと諦めて居るだらうぢやないか。|(太陽-192504-025_政界鬼語_口語)

例えば(32)は「無いものは無い」に、(33)は「大きいことは大きい」にほぼ等しく、それらの形式名詞を補った表現に置き換えられることから、この類型における八の前の形容詞は連体形由来とみなしてよいと判断される。

4.2 現代語形の終止形の例・動詞の場合

次に動詞について述べる。動詞の場合にも類型が見受けられる。

4.2.1 助詞八を伴うもの

動詞の場合、助詞八が伴われた例において、同一動詞の肯定 - 否定ペアの中に見えるものが顕著な類型をなしており、特に目を引く。

(38) |碌な事の出来ないのは初めから知れて居ります。|けれども一心は一心ですからねえ。|出来る出来ないは二の次にまア根限りに働かうと思つて居ます。|(太陽-190113-020_左巻(承前)_口語)

(39) |無論耳は聴えなくなるんだが、|聴える聴えないは別として、|あの年齢では切開した處の肉の上りが遅く、|局部に熱を持つて、|(太陽-190916-021_死んで行く人_口語)

(40) |『いけない!それがいやだから君に相談するんだよ。|實はね、|この相談に乗る乗らないは君の自由だが、|たとへ乗らないにしても、|發明の祕密だけは保證してくれるだらうね?』|(太陽-192505-049_ラヂオと犯罪_口語)

(41) |私はその態度を甚だ善いと思ふ。|術策が潜んで居る居ないは別として、|確かに善い態度だと思ふ。|(太陽-192801-024_当局者辞任せよ)

これら肯定 - 否定ペアの例は、先の(24)~(26)や(27)~(28)における対義語のペアに近く、やはり「出来るかどうかの問題」「乗るかどうかの判断」などの含意を生じさせてカテゴリ(という体言的な性格)を与え引用的に示される点で、先のものと同通する性質を持つ。これらの用例にも、今日的な終止形準体法との近さを認めてよいと考えられる。

4.2.2 助詞モを伴うもの

動詞の肯定 - 否定ペアが助詞モを伴う例も、まとまった形で現れひとつの類型をなす。

(42) |(まさ子の手にしがみつく。)| |まさ子。|(強ひて平靜を装つて)|はな子さん。|何です。|ゆるすもゆるさないもないぢやありませんか。|(終に泣聲になる。)|(太

陽-191701-039_戯曲 生きんとすれば 二幕 _口語)

(43) | 『あら、隠すも隠さないもありませんよ。|婆アやも一處ですから、|あの人に聴いても分りまさアね。|(太陽-190107-020_東京病_口語)

(44) メーブルとの結婚は眼に見えて駄目になるの他ない。|然し、|父親の悪事を表むきにするもしないも、|ピイチの胸三寸のうちにあることで、|自分にはどうする力もない。|(太陽-192514-043_長篇探偵小説 ハートの九『第八回』_口語)

(45)我等兩人は長途の旅の労も忘れて、|喜ぶも喜ばないもあつたものぢやない。|實に嬉しかつた。|(太陽-191713-047_岩村透君の手紙_口語)

(46) | 『奈何いふ譯でせう、|何處が氣に入らないのでせう。』| 『氣に入るも入らないも無い。|極氣が小さく吝に出來て、|悪く云やア吝嗇だから思切つたお金は中々出し得ないのサ。(太陽-190105-024_投機_口語)

(47) |其頃はまだ其處は誰の許可地でもなかつた、|採取人は誰の許可地であるもないも頓着せず、|唯だ砂金が多くあると云ふ故、|無暗に堀りに行き、|數百人も集まつた、|(太陽-190101-031_北海道枝幸砂金地巡見_口語)

(47)「～である/ない」は厳密には助動詞とその否定のペアであるが、類例としてここに挙げた。それぞれが助詞モを伴う動詞の肯定 - 否定ペアは、伝統的な「行くも行かぬも別れては」「知るも知らぬも逢坂の関」(後撰集 雜一・1089)などの連体形準体法に由来するものであり、今日的な終止形準体法に対する何らかの間接的な影響については、先に4.1.3.の末尾に述べたとおり、注意深く検討するべきであろう。

なお、これら[肯定+モ 否定+モ]に続く述語部分に来るものは、「ない」((42)(46))や「ありません」((43))「あつたものじゃない」((45))など、ほぼ同一の内容を表すものである。肯定・否定ともいずれも選択肢として「ない」ことを表すこれらの類型的な表現は、(47)「頓着せず」の例を含め、「肯定か否定かというかたちで行われる問題設定じたいが、存在し得ないか、問うに値しない」ことを意味する。その点でこれらは、先に見た形容詞の(29)(30)と特に近い。

対義語のペアを用いる形容詞の場合((24)~(31))と、肯定 - 否定のペアを用いる動詞の場合((38)~(47))とは、対比の示し方が異なるだけで、これらはいずれも、対比的な二項に代表されるある種のカテゴリ提示の働きを持つ。大半は旧来の連体形準体法に由来するものでありながら、引用的な要素を備える点において今日的な終止形準体法との類似性を持つことは、注意される傾向であろう。

5. おわりに

コーパスから得られた用例の検討を通じて知られる限り、近代における終止形準体法相当の(または類似する)表現は、思いのほか多様である。実際の用例の検討を通じて、本稿では、特徴的な類型の存在を指摘し、それらの意味構造と準体的であることの関連性について主に考察したが、これらに準ずるものとして、なお、次のような複合的なもの((48))や一部が省略されたもの((49))も見られる。

(48) |勝ちさへすれば宜いとするのは丁度腹さへ充つれば宜いとするやうなもので、|それでは旨いも旨くないも酸いも甘いも鹽加減も何も論は無いといふもので、|まるで滅茶苦茶である。|(太陽-192513-029_将棋のたのしみ_口語)

(49) 太陽 - 190911 - 023__告白__口語：』|と寛三は答へたが、|腹の中では|『現在自分の弟の妻が死にかゝつてると云ふに、|忙がしいもないもんだ』|と云ふやうな反感がむら～～と起つたのだ。|しばらくして、|二人は病室を出て(太陽-192513-029_将棋のたのしみ_口語)

また、文語文を基調とした文脈の中で、旧来の連体形終止法が、古語の連体形ではなく現代語の語形で行われる例が、わずかながらも見受けられることを付記しておきたい。(50)は二段動詞が一段化して、(51)はナ変動詞が四段化して、それぞれ現代語と同じ終止連体形に格助詞ヲが伴われたものと見られるが、いずれも今日的な終止形準体法との区別は截然と付けづらい。

(50) |余は、|之を祝す。|左れど、|此に極めて明白なる一事あるに、|其事のあまりに明白すぎるを以て、|諸君は此際或いは失念せられたるならんか。|余は、|更ためて此一事を注意すべし。|(女学雑誌-189427-03-卒業は始業なり)

(51)あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸髻の大きさ、猫なで聲して人の死ぬをも構はず、大方臨終は金と情死なさるやら、夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光(AX_たけくらべ(樋口一葉))

これらと、今日的な 終止形準体法 との連関や異同等、注意深く考察すべき点は多い。本稿は、ひとまずの記述と問題提起に終わったが、コーパス利用で可能となる効率的な用例収集と分析を通じて、その歴史的な背景や位置付けなどの解明に向け分析を継続したい。

文 献

藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』(和泉書院)

島田泰子(印刷中)「広告表現等における 終止形準体法 について」(『叙説』奥村悦三先生御退休記念特別号 2013.1 刊行予定)